

成人未婚子の結婚観から家庭科教育における家族を考える —岐阜県山県市の調査から—

三輪聖子

生活科学科生活科学専攻

(2017年9月25日受稿)

Consider Family of Home Economics Education from the View of Marriage of Adult Unmarried Child —Based on the Survey of Yamagata City, Gifu Prefecture—

Department of Home and Life Science, Major in Home and Life Science,
Gifu Women's University, 80 Taromaru, Gifu, Japan (〒501-2592)

MIWA Satoko

(Received September 25, 2017)

要 旨

日本の現代社会は少子化が進行し、国は何とか歯止めをかけたいとあらゆる方策を講じ、少子化対策に躍起になっている。しかし日本の場合、未婚のまま子どもを産むことは非常に少ないため、子育ての前に結婚をすることが必要になってくる。しかし、生涯未婚率は上昇し続けている。そこで、結婚しない若者の結婚に対する意識を調査し、その結果から家庭科教育の家族・家庭の意義において中学生や高校生に伝える必要があることは何であるか探ることを目的とした。結果、将来の生活設計をしっかりと持つことができること、自力で相手を探さなければ結婚に結び付かないこと、結婚の良さを伝えていくことなどが明らかになった。

キーワード：結婚，家族，家庭科教育

1. 目的

日本の現代社会は少子化が進行し、人口減少期に入った。国は何とか歯止めをかけたいとあらゆる方策を講じ、少子化対策に躍起になっている。また、中学校・高等学校家庭科の学習指導要領改訂には「少子化社会対策大綱」を受け「妊娠や家庭・家族の役割については、発達の段階に応じた適切な教育の推進を図る」ことを提言している。このように少

子化対策として子どもを産み育てやすい環境を整備していくことは必要だが、日本の場合、未婚のまま子どもを産むことは非常に少ない。子育ての前に結婚をすることが必要になってくる。しかし、生涯未婚率は上昇し、婚姻率も1970年代前半と比べると半分近くの水準になっている。

そこで、結婚しない若者の結婚に対する意識を調査し、その結果から家庭科教育の家族・家庭の意義において中学生や高校生に伝

える必要があることは何であるか探ることを目的とする。

2. 方法

岐阜県山県市の住民基本台帳から無作為抽出により子世代(20~50歳未満)500人、親世代(60~80歳未満)500人を選出し、無記名式質問紙法により調査を実施した。調査方法は、2016年8月下旬~9月上旬にかけて郵送にて発送、返送を行った。回収は、子世代(20~50歳未満)118人、親世代(60~80歳未満)217人で、回収率は、子世代23.6%、親世代43.4%、全体で33.5%であった。本論文では子世代118人のうち未婚者30人のデータを使用する。

3. 日本における結婚の状況

日本における婚姻件数と婚姻率をみると1972年をピークとし、その後1987年まで急激に減少している。1972年は婚姻件数1,099,984組、婚姻率10.4であったが、1987年は婚姻件数696,173組、婚姻率5.7となっている。婚姻件数は36.7%、婚姻率は45.2%の減少率である。1990年から2000年にかけて若干上昇しつつ横ばい状態であったが、2000年を過ぎると徐々に減少傾向となっている。2015年の婚姻件数は635,096組となり年々最低を記録している。

また、年齢別に未婚率をみると男性も女性も1975年頃からの年齢も未婚率が上昇している。2015年の国勢調査から男性の30~35歳の未婚率は47.1%と半数近くが未婚であり、女性の30~35歳は、34.6%が未婚となっている。

生涯未婚率をみても1985年頃からそれまで女性の方が高かった未婚率が男性と入れ替

わり、男性の生涯未婚率が急激に上昇し、2010年には20%を超えた。今後もますます高くなっていく可能性があり、2030年には男性の3人に1人が、女性の4人に1人が生涯独身と予想されている。

また、初婚年齢をみると、1995年頃から上昇し2011年頃からは横ばい状況である。2015年は男性31.1歳、女性29.4歳となっている。

これらの状況から日本全体が、未婚化・晩婚化へ向かっており、かつて皆婚規範が強く、特別な理由がない限りみんな結婚するといった時代は過去のものとなった。今や結婚は個人的な選択肢の一つとして考えられている。

4. 調査結果

(1) 山県市の概要

本調査対象地域は岐阜市の北部に隣接し、地勢は山地丘陵部が多く、人口約27,000人の市である。2000年頃から人口が減少に転じ



図1 山県市の位置

ている。2010年から2015年の3世代同居世帯の減少率は22.5%と非常に大きく、単身世帯は増加傾向にある。特に、高齢者がいる世帯の伸びが著しい。また、男性の未婚率は、30歳～40歳代にかけて全国平均よりも2～6%高くなっている。

(2) 未婚者の意識と実態

図2から未婚者の性別をみると女性がやや多くなっているが、ほぼ同じ割合であった。

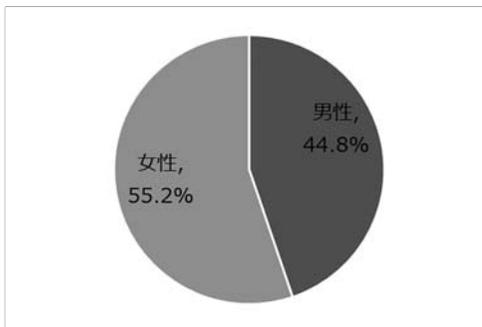


図2 未婚者の性別

今後の結婚の意思(図3)は、「相手を見つけることができればすぐにでも結婚したい」人は男性15.4%、女性37.5%であった。女性の方がすぐにでも結婚したいという希望が強い。さらに、今すぐではないが「いずれは結婚したい」「結婚を考えている相手がいる」という人を合わせると、結婚願望がある人は男性77%、女性75%となり、8割近くの人が結婚したいと考えていることがわかった。

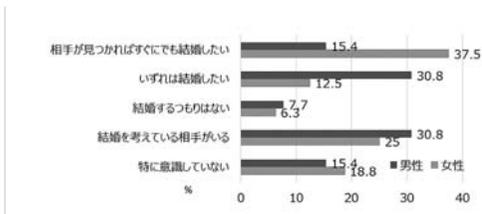


図3 性別×今後の結婚の意思

しかし、結婚相手と出会う機会(図4)は、男性46.2%、女性43.8%と半数近くが「全くない」と答えていた。さらに「あまりない」を加えると8割近くが出会う機会がないのである。

そこで、相手を探すための婚活をしているか(図5)を尋ねると、「現在している」人は、男性16.7%、女性18.8%と8割以上の人にはほとんど何も活動していない状態にあることがわかった。また、結婚に対して親や親せきから言われること(図6)に対して61.7%は、「特に言われることはない」と回答しており、6割以上は周りも何も言っていないということがわかった。

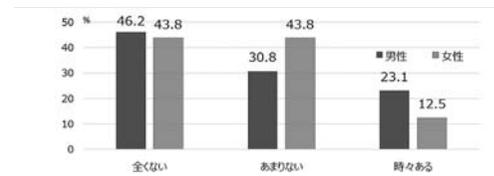


図4 性別×結婚相手と出会う機会

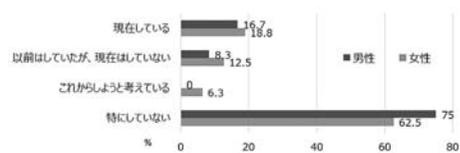


図5 性別×婚活状況

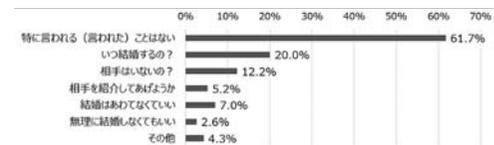


図6 結婚に対して言われること

未婚者に結婚しない理由を尋ねたところ、1位は「相手にめぐり合わない」25.5%であった。結婚希望はあるものの相手がおらず結婚できないということである。2位は「結婚する必要性を感じない」「経済的に余裕がない」

11.8%であった。1つは結婚する意思がないということであり、もう1つは結婚希望があっても経済的に無理だということである。また、「独身の自由さや気楽さを失いたくない」や「趣味や娯楽を楽しみたい」といった自分一人の生活を楽しまたいと考えている人もいる。

性別による未婚の理由(図7)をみると、全体と同様の傾向であるが、特に女性は「今は仕事(または学業)に打ち込みたい」が12.5%と高くなっていた。男性は女性と比べて「経済的に余裕がない」が41.7%と非常に高く、収入が低いので結婚できないと考えている人が多いのではないと思われる。また、「異性とうまくつき合えない」男性が16.7%いるので、女性との付き合い方を教えるサポートが必要になる。「親や周囲が結婚に同意しない(だろう)から」が8.3%おり、家族が足かせとなっている場合もみられる。

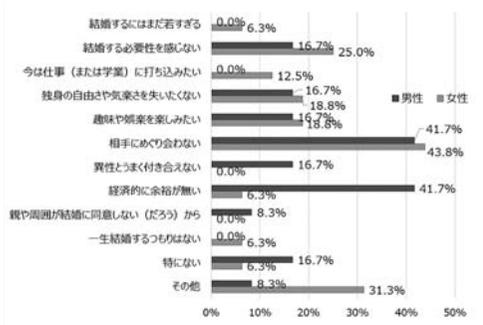


図7 性別×未婚理由

また、独身でいることの不便・不安(図8)を尋ねたところ、1位は「将来のことを考えるとき」62.1%で、他項目に比べてかなり高くなっている。次に「病気やケガのとき」27.6%、「相談できる人が身近にいない」「収入が少ない」は2割近く存在していた。独身でいることは、将来自分が高齢者になり最期を迎えるときにどうなるのか想像することが難し



図8 独身でいることの不便・不安

く、何とも言えない不安があると考えられる。「特に不便を感じない」は34.5%おり、親との同居も多く、生活に対する不便さはないという人も少なくない。

つまり、未婚者で結婚の意思をもつ人は8割近くいるが、相手とめぐり合う可能性はほとんどなく、活動もしていないということになる。これらの状況を見ると結婚にたどりつくことは非常に困難だと言わざるを得ない。本人がその気になって相手を探す努力をしなければ希望はかなえられないし、家族や周りの人々もサポートする必要があると考えられる。

結婚のよい点を聞いたところ1位から5位までをあげると表1のようになった。1位の「自分の家族や子どもがもてる」55.2%、2位「精神的な安らぎの場が得られる」51.7%と半数以上の人があげていた。経験者である既婚者も1位から5位まで同様の項目をあげているので、これらは実態に即したものであると考えられる。これら結婚の良さを伝えることによって結婚につながっていくのではな

表1 結婚のよい点ランキング

順位	項目	未婚%
1位	自分の家族や子どもがもてる	55.2
2位	精神的な安らぎの場が得られる	51.7
3位	愛している人と暮らせる	34.5
4位	社会的信用を得たり周囲と対等になれたりできる	27.6
5位	親を安心させたり周囲の期待に応えられたりできる	20.7

いかと考えられる。

5. 結論と課題

以上の結果から、未婚者の意識と実態をまとめると次のようになる。

- ・相手がいる人も含めて男女ともに8割近くが結婚願望をもっていることがわかった。
- ・未婚者のうち、性別に関係なく約8割は結婚相手との出会いがない。
- ・未婚者のうち、現在約8割の人が婚活をしていない状況であった。結婚を希望する人が8割いるにもかかわらず、何もしていないことがわかった。
- ・未婚理由の1位は「出会いがない」男性41.7%、女性43.8%であった。2位は男性が「経済的に余裕がない」41.7%、女性が「結婚する必要性を感じない」25.0%であった。
- ・独身でいることに将来の不安を感じている人は62.1%いるが特に不便を感じていない人も34.5%いた。
- ・結婚に対して親や親せきからは特に何も言われない人が61.7%と最も多かった。
- ・結婚の良さは自覚していると考えられる。

これらの調査結果を踏まえ、家庭科教育の中学校・高校における家族や家庭生活の内容についてのアプローチの仕方を再考しなければならないのではないかと考える。家族や結婚について多様化・個人化を認め、個人の生き方の選択肢の一つとして「結婚」を考えてもよいのではないかと伝えてきたし、社会で

もそのような考え方が一般化している。つまり、これらの意識が結婚を希望しているにもかかわらず、結婚相手を探すことに消極的になったり、相手を見つけられなかったりしている。また経済的負担が増え、自己の自由が奪われると考える人も少なくない。それに対し周囲や家族は心配しながらも見守るしかない状況になっている。少子化問題とかかわりながら家庭科教育においても積極的に「結婚」に対する意識付けが必要なのではないかと考える。「結婚」は強制するものではないが、より積極的に捉えられるよう方向付けられるようにする必要があると考える。具体的には、将来の生活設計をしっかりと持つことができること、自力で相手を探さなければ結婚に結び付かないこと、結婚の良さを伝えていくことなどをあげることができる。

なお本調査は「山県市結婚に係る調査研究事業」によるものである。

参考文献

- 1) 厚生労働省編『平成25年版厚生労働白書—若者の意識を探る—』2013
- 2) 国立社会保障・人口問題研究所編著「わが国独身層の結婚観と家族観—第14回出生動向基本調査—」2012 厚生労働統計協会
- 3) 文部科学省『中学校学習指導要領解説技術・家庭編』2008 教育図書

